

「自然の博物館」の魅力

本間 岳史

ここ10数年の間に、関東の各県では大型の自然史系博物館が次々に建設され、当館と比較して、格段に大規模な建物と潤沢な予算、充実したスタッフによって運営されています。特別展の予算等も満足に持たぬ当館では、他館の特別展の終了直後にトラックをチャーターして、廃棄される予定の展示製作物を“回収”し、当館の特別展の展示物として再利用したこともあります。このように、県立館としては極めて小規模な当館ですが、以前調査した結果驚いたことは、スタッフ1人あたりの活動量が他館と比較してトップレベルにあることでした。すなわち、延床面積、予算、学芸職員数、入館者数、登録資料数、教育普及事業数などの実数ではかないませんが(図1)、登録資料数÷延床面積、入館者数÷予算、教育普及事業数÷予算、教育普及事業数÷学芸職員数の単位あたりの実績は、いずれも当館がトップという結果だったのです(図2)。予算やスペースに大きな制約のある与条件のなかで、職員一人ひとりがマンパワーを発揮して活動量を増やすことにより、単位あたりの実績を大きくアップさせていたのです。これは、全国に誇れる当館の優れたところです。

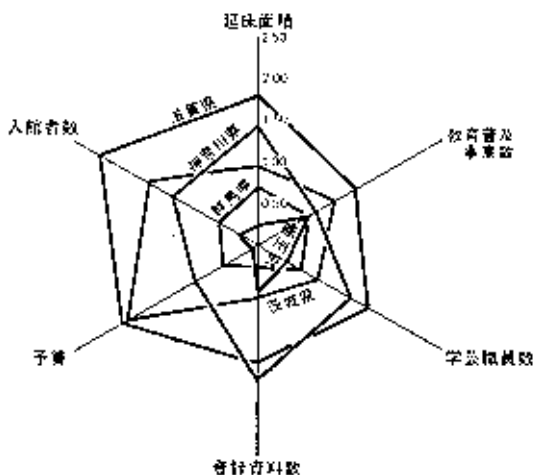


図1 実数比較 (平成10年度)

次に常設展示を見てみましょう。展示物は、職員自らが野外で採集してきた自然史標本を中心に構成されています。借り物や購入品でなく、自前の資料で埼玉の地域性を浮き彫りにしているところ

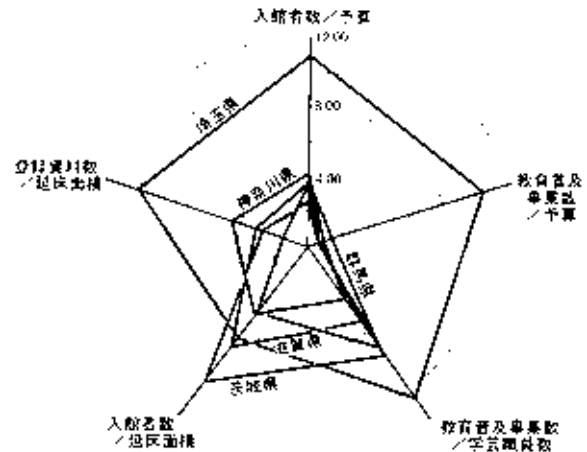


図2 単位当たり実績比較 (平成10年度)

るも、当館の大きな特徴といえるでしょう。この展示室から一步外へ出れば、そこは名勝・天然記念物「長瀬」に指定されている荒川溪谷。四季折々の素晴らしい景観を見せてくれます。まさに野外の自然がそのまま屋外展示場・実習場としての機能を持っているのです。展示室(標本)の見学と野外(生きた自然)の観察とを組み合わせることにより、大きな学習効果があがります。このようなねらいで学校の先生方と連携・開発した「地域の自然を学習の場とした体験学習プログラム」は、学校の現地体験学習等に大いに活用されています。

当館は、当地の“日本地質学発祥の地”といわれる地質学の研究と教育の長い伝統を引き継ぎ、さらに新しい伝統をつけ加えてきました。鈴木館長が「瀬」第10号で述べておられるように、昨年は、当館の前身である秩父自然科学博物館の開設から60年目(還暦)に、さらにその前身の鑛物植物標本陳列所の開設から88年目(米寿)に当たります。そして来年は当館が開設してから30周年に当たります。大きな節目の時でもありますので、上に述べたような全国に誇れる優れた部分を一層のぼし、埼玉県内唯一の自然系総合博物館としての役割を果たしていきたいと考えています。職員が皆親切なもの当館の売りですので、お気軽に御来館ください。

(ほんま たけし・専門員兼学芸員)